

西宮船坂ビエンナーレ2012「竹林」について

“Chiku-rin” at Nishinomiya Funasaka Biennale 2012

森本 真 武庫川女子大学 准教授

井上雅人 武庫川女子大学 講師

Shin Morimoto

Associate Professor,
Mukogawa Women's University

Masahito Inoue

Lecturer,
Mukogawa Women's University

概要

2012年10月21日（土）から11月24日（土）にかけて、兵庫県西宮市山口町船坂において「西宮船坂ビエンナーレ2012」が、船坂里山芸術祭推進委員会の主催によって開催された。この芸術祭に「井上雅人研究室+森本真研究室(武庫川女子大学)Masahito Inoue Laboratory + Shin Morimoto Laboratory (Mukogawa Women's Univ.)」名義で「竹林」というタイトルの作品を出展した。

「竹林」は旧船坂小学校の四年生の教室を使用した。旧船坂小学校裏の竹林から竹を切り出し、教室内に設置し、空間を構成した。この作品のコンセプトは以下の通りである。

この部屋で私たちは「いま、インテリアデザインが出来ることは何か」を模索しました。この部屋はインスタレーションではなく、休憩室です。私たちは、リラックスするとはどういうことか、を考えることからスタートしました。船坂という特別な場所を感じ、人とつながり、見逃していたものに気づいてもらいたいと思います。

また、鑑賞者=休憩者にたいしては以下のような注意を呼びかけた。

休憩の心得

- 靴を脱ぎ、壁際にそって奥まで進み、床に腰かけて耳を澄まし、聞こえる音の種類を数えてみてください。
- 竹に触れないように、静かにゆっくり歩き、すれ違う時には道を譲り、先を急がないようにしてください。
- 先に休憩している人がいたときは、おじゃましますと、一言、声をおかけください。
- 奥にノートがかかっていますので、表紙を良く眺めてから、他の人の文章を読み、お書きください。
- 飲食をされる方は、隣りにもお裾分けをし、立ち上がる時にはきれいにし、ごみはお持ち帰りください。
- 風が塵を運んで来たのに気づいた方は、黒板の横に箒を吊っていますので、竹の外側だけ掃き清めください。
- 花を持って来てくださった方は、竹に触れぬよう花を替え、挿してあった花はお持ち帰りください。

1. デザインについて

「西宮船坂ビエンナーレ2012」は、若者が減少する船坂地域の活性化を目的とし、地域住民で組織する推進委員会が主催し、行政の後押しも借りて開催された。本格開催は今回が2回目となる。船坂は西宮市の北部、六甲山の北側に位置するのどかな里山である。「竹林」は、その里山を見渡すことのできる小高い山の中腹に建つ旧船坂小学校の四年生の教室を使用した。2010年3月に廃校となり137年の歴史を閉じたこの小学校は、最近都会では見られなくなった、どこことなく懐かしい雰囲気の残る古い木造の校舎である。この特別な場所に潜在する何かを感じ、人とつながり、見逃していたものに気づいてもらうための休憩室としてデザインした。

「竹林」で使用した四年生の教室は東側校舎の平屋棟に位置し、教室の南側に面する外部通路から直接のアプローチとなる。校舎は船坂を見渡せる斜面に建っているため、教室からは美しい里山に広がる段々畑や点在する民家などを望むことができる。

この教室内に地元の竹を林立させ、まるで竹林が教室の中に突然現れたかのような空間構成とした。来場者は小学校の裏で見かけた竹林に、この教室で再び出会うことになる。

教室の形状は三間四方の正方形で、広さは約9坪（約30㎡）、である。教室内は土足禁止とし、二ヶ所の出入口から壁際に沿って進む回遊式の平面計画とした。出入口の前には靴を脱ぐためのスペースとしてスノコを設置した。室内の三カ所に飾った竹の花入れには、船坂に自生しているススキやコスモスなどの草花を活けた。教室の奥のゆったりとした空間にはクッションを用意し、床に座り壁にもたれて休憩できるスペースとした。壁には、小学四年生のころを思い出すような質問を表紙に書いた6冊のノートを吊るし、他の人の文章を読んだり、自由に書いたりしてもらえるようにした。

竹は地元のものを使用した。少しでも船坂の竹林保全の役に立つように、小学校裏の竹林から間引くように切り出した。また、自然に枯れて転倒した竹も使用した。切り出した竹の多くは天井の高さに合わせて切断し、床に自立させながら、転倒を防ぐため天井にも固定する、という方法で設置した。竹自体の重さは床で受けているため天井にかかる負荷はほとんどないが、もし人が寄りかかるなどの想定外の荷重が

かかったとしても天井が落ちたり竹が転倒したりしないように、天井板を受ける下地の位置を確認したうえで天井下地に直接固定することとした。天井下地は天井裏に格子状に組み立てられ、天井照明の位置とも重なっており、竹を天井に固定できる位置は限定された。この制約のなかで、竹の配置に作為のあとが見えないように平面図上での検討を重ねたうえで、模様による確認を行った。細くて軽い数本の竹は、床から数ミリ浮くように天井から吊るし、わずかな空気の流れによって静かに揺れる状態とした。一見、自立している他の竹と区別はつかないが、床に座ってゆっくり休憩する人にだけ気づいてもらう意図である。竹と天井との固定は、作業効率と安全性を考慮して樹脂製の結束帯とヒートン金具を使用した。竹の表面処理には真鍮のワイヤーブラシを使用し、付着している白い粉をツヤが出るまで磨き落としてそのまま表面仕上げとした。

展示期間終了後、使用した竹は竹炭の材料として地元の竹炭工房へ運ばれた。

約一ヶ月の展示期間中、多くの来場者に休憩していただいた。里山の景色を眺めたり、室内にしつらえた草花を見つけたり、耳を澄まして聞こえる音の種類を数えてみたり、ノートをながめながら隣の人とのつながりが生まれたり、子供の

頃の思い出にひたったり、多くの来場者がそれぞれ思い思いにリラックスしている印象を受けた。その中には、お気に入りの場所として展示期間中に何度も休憩しに来る人もいたとうかがった。休憩は私たちの生活に欠かせない。休憩するとはどういうことか、を考えることは、生活するとはどういうことか、を考えることに直結する。つまり「休憩をデザインする」ことは「生活をデザインする」ことでもあるのだ。「竹林」は、船坂の休憩室として十分に機能したといえるだろう。この成果をふまえて、今後さらに「休憩のデザイン」の展開を試みて行きたい。

(文責：森本)

2. 鑑賞者について

今回われわれが制作したのは、インスタレーションとインテリアデザインの間の空間であった。公には「休憩所」と称したので、インテリアデザインを行ったことになるが、「あえて休憩所と称することで作品と鑑賞者の関係性を意識的に考えてもらうインスタレーション」を制作した、ということもできる。

美術の分野における、いわゆるレディメイドと称される作品ジャンルは、日常品に「これは作品である」と宣言させて、

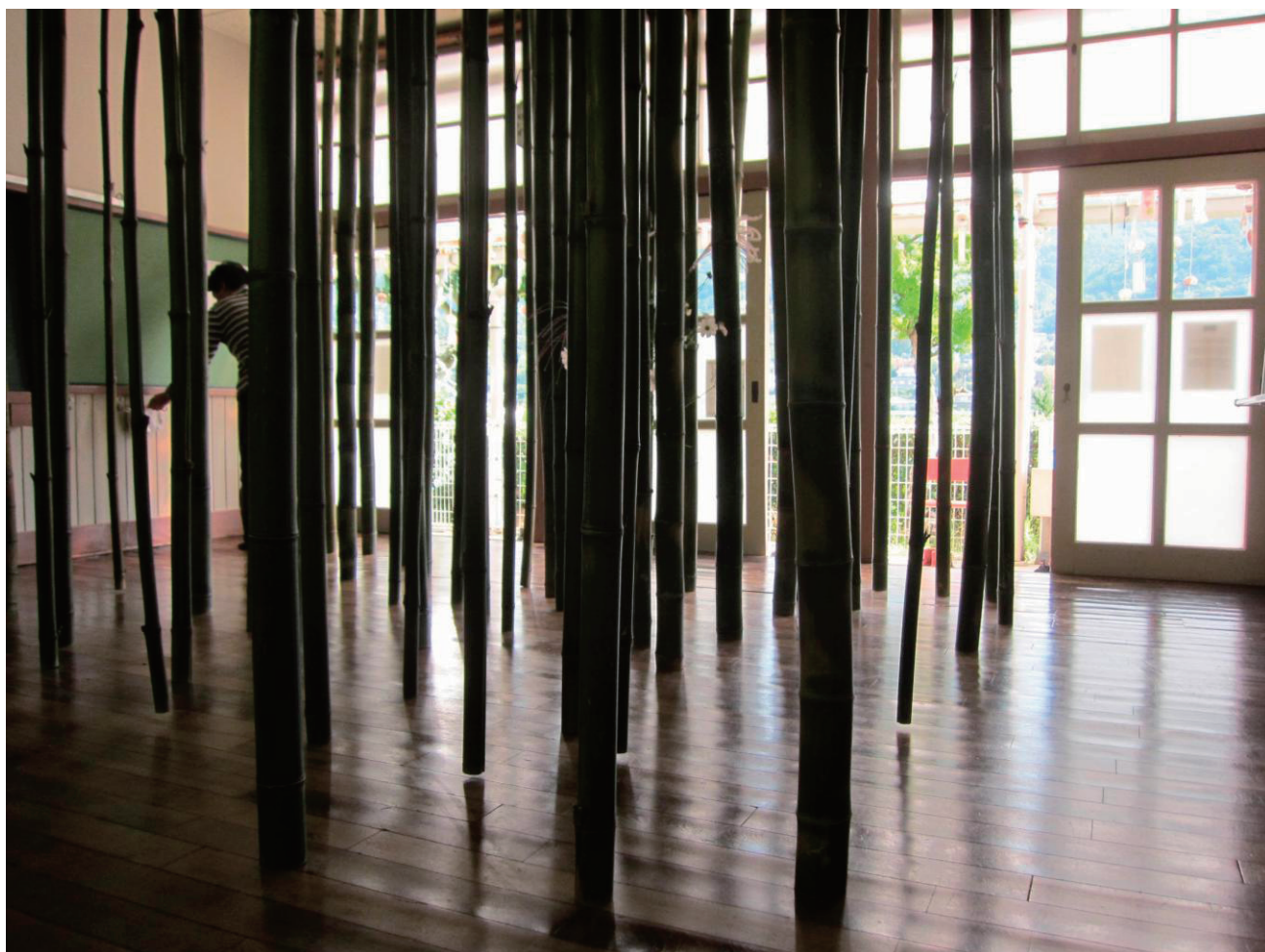


図1 作品全景

作品の作品性を考えさせるものが多い。それどころか現代美術の多くは、ギャラリーや美術館といった装置の力によって、作品と鑑賞者という関係性を強要し、美術品として見てもらうことによって成立している。あまりに装置の力に依存するあまり、ドローイングや即興的な作品など、未完成とも思えるような作品が溢れることにもなったが、装置の力を借りること自体は非難されるべきことではなく、美術を鑑賞する眼差しを借りることによって、違う次元へと思考を導いていることの意義は大きい。

しかし、今回の作品では、そういった従来の方法とは逆に、「これは作品ではない」と宣言することによって、作品の作品性を考えてもらうことにした。このプロジェクトは、作品を陳列すべき場所に作品ではない物が並んだとき鑑賞者はどのように反応するか、という実験でもあり、それを通して「鑑賞」とはいかなる行為かを知る試みであった。また、今回の展示の場が、元小学校という、ギャラリーでも美術館でもない場所であったことも重要であった。本来、展示する場所ではない場所を展示する場所と称し、そこに本来、展示されるべきはずの美術ではなく、美術にはあたらないと自称する物を展示するという、複雑な状況を作り出し、展示空間とは何かを知る試みとも言えた。

同時に、それらは、インテリアデザインと、その利用者の関係性を考える試みでもあった。来訪者に直接求めたのは、「鑑賞」ではなく「休憩」という行為であった。来訪者は「休憩」をしようとしても、否応無く、作品の内部に入り込み「鑑賞」という緊張した行為をしなければならなくなる。床を磨きあげ、クッションを置き、花を活け、来訪者を「休憩」へと導く仕掛けを設けながら、靴を脱ぐことと、竹に触らないことを求め、「鑑賞」の所作にはめた。そのような二律背反した行為を求められて、来訪者は果たしてリラックスすることができるであろうか、という実験でもあった。

結果として、来訪者の多くは、そういった入り組んだ状況について深くは考えなかったようではあるが、戸惑いが行動として現われたようだ。まず、他の展示室が土足で鑑賞できることもあって、靴を脱がない来訪者が続出した。土足厳禁であることを注意すると、半ば怒るような反応を示す来訪者がいる一方で、他の来訪者が土足で侵入してくることに嫌悪感を示す来訪者もいた。廃校となった空間に、土足厳禁も何も無いはずではあるが、来訪者たちは制作者の勝手に設けたルールに渋々従ったり、積極的に内在化したりした。それとは逆に、美術作品としては扱わず、黒板にラクガキをしたり、禁止されているにもかかわらず「竹林」の中に入り込むのみならず、竹を触って動かしてみたり、中には、ぶら下がる子供までいた。また、ボランティアスタッフの中には、毎日のように来て座っては静かに休憩して帰るという、作者が意図した使い方通りに空間を利用する来訪者もいたと聞く。

短い展示期間ではあったが、空間を作るということが、同時にルールを作らざるを得ない行為でもあり、ルールは、作る側と受け入れる側の交渉の中で次第に確定していくということが、うかがわれた。美術館という強い規範を持った空間に置かれない限り、作品が作品であり続けるには、常に作者側の干渉が必要であり、その美術館においてすら、入場料を取ったり、監視員を配置したりといった制度が維持されないと、作品が作品であり続けることは難しい。美術／鑑賞という関係性のみならず、空間／休憩という、それとは対極な関係性を来訪者に持たせるのにも、作者の常なる介入は必要なようだ。それは、インテリアデザインにおいても、特定の意図をもった空間を維持するためには、作者側の恒久的な介入が不可欠であるということを示唆するものであった。

(文責：井上)

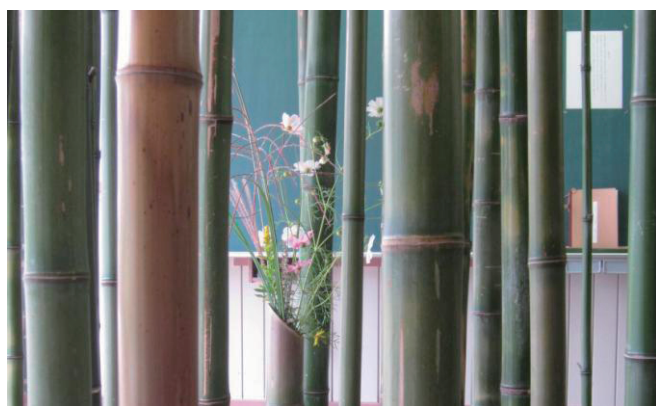


図2 花器



図3 休憩の心得



図4 模型写真

謝辞

本作品を制作するにあたり武庫川女子大学生活環境学科助手の原田陽子さん、井上研究室と森本研究室の学生に手伝っていただきました。また、船坂里山芸術祭推進委員会にはお世話になりました。深謝いたします。

作品概要

作品名 : 「竹林」
 所在地 : 旧船坂小学校・四年生教室
 兵庫県西宮市山口町船坂2103-2
 面積 : 約30㎡ (三間×三間)
 材料 : 船坂の竹67本、竹の花入れ3個、船坂の草花、ノート6冊、クッション10個、スノコ4枚
 展示期間 : 2012年10月21日～11月24日

※写真は、すべて筆者撮影。

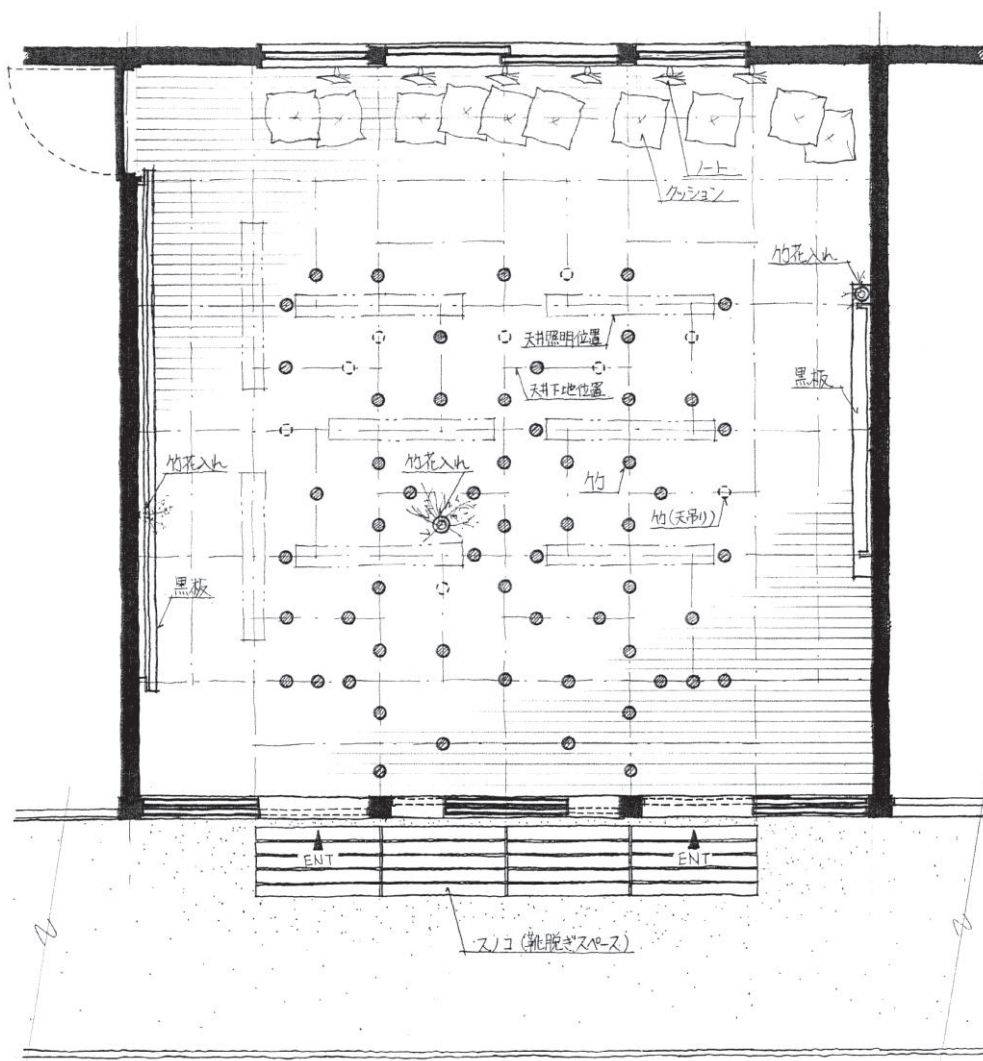


図5 平面図